

協働のまちづくり活動事例集

# 宮城県美里町

ローカルに学ぶ  
持続可能な  
まちづくりエッセンス



今日、日本の多くの地域では、少子高齢化、人口減少など多くの課題を抱えています。本町においても同様であり、地域の活力やコミュニティの維持について難しい状況を迎えています。そのような局面を乗り越えるためには、地域において自らが地域課題を解決する自治基盤を強化することが重要です。そのためには、地域における住民活動の活性化を図り、魅力・活力ある地域にする必要があります。

この事例集では、町内の地域や団体の活動の一部を紹介しています。本町の地域で長年行われている「お祭り」、「特産品」、「姉妹都市との交流」、地域おこしとなっている「新たなイベント」、東日本大震災を機に始まった「新たな形の防災訓練」や「コミュニティ形成」など、地域・団体自らが企画し、多くの住民が参加・実施しているものです。このような活動が地域のつながりを生み出し、地域コミュニティの形成やまちづくりの基盤となるものです。

この事例集の作成にあたり、本町と連携協力に関する協定を締結している宮城大学の皆さんに作成の御協力をいただきました。各地域を実際に訪れ、地域で活動いただいている方々にお話しを聞き、取材したものです。地域で長年行っていることが、宮城大学の皆さんには新鮮に映ったようです。取材を受けた皆さんも当たり前に行っていた活動が、地域づくり、まちづくりの活動につながっていることを再認識する機会となったようです。

本町の各地域においては、今回紹介した事例以外にも様々な地域活動を行っており、地域の活性化の一翼を担っています。今後も地域活動を継続していく上で、本事例集が参考となり、また、これからの持続可能なまちづくりの礎を築くものになればと考えております。

## はじめに

### 目次

#### 事例紹介

- 02 持続可能なまちづくりのモデルとして……………本小牛田地区・本小牛田地区コミュニティ推進協議会
- 06 住民の生活スタイルに合わせ変化し続けるコミュニティ活動……………駅東地区・美里町駅東自治会
- 10 明治期からの特産品「北浦梨」に新たな価値を見出す試み……………北浦地区・北浦梨ブランド化研究会
- 14 地区の仲間を応援する声が響く運動会形式の楽しい合同防災訓練……………青生地区・青生地区合同防災訓練実行委員会
- 18 「世界一の大俵」がシンボル農村文化を生かした一大イベント……………南郷地区・田園フェスティバル実行委員会
- 22 泥だらけでの笑顔があふれる田んぼを活用した「全国大会」……荻埴地区・全日本どろんこそりレース大会実行委員会
- 26 米国・ウイノナ市との交流を通じて町に異文化理解の土壌が築かれた……………美里町国際交流協会
- 30 地域に暮らす仲間が集まり「土田畑村」に新たな風が起きた……………南郷地区・DoTaBaTaナイトマルシェ実行委員会
- 34 おわりにかえて

# 持続可能なまちづくりの モデルとして

本小牛田地区・本小牛田地区コミュニティ推進協議会



## 全国的なコミュニティ重視 の流れの中で発足

1969年、経済企画庁国民生活審議会調査部会のコミュニティ問題小委員会が報告書「生活の場における人間生活の回復」においてコミュニティの重要性を訴えた。これを受け、地域コミュニティに関する政策が全国に展開されていくことになる。

そのような流れの中、旧小牛田町域の中心部に位置する本小牛田

## 「夏祭り」「秋祭り」を運営

推進協議会の主な事業は、地域の祭りの運営や、コミュニティ新聞の発行などである。

1991年に始まった本小牛田夏祭りは、初日に「ちびっこ相撲大会」と金魚すくい・盆踊り・大抽選会、2日目に「花火大会」という2日間の日程で盛大に開催されていた時期もあるが、現在は「ちびっこ相撲大会」、盆踊り、ステージ発表、大抽選会を1日で実施す



賑わうちびっこ相撲大会



世代を越えて楽しめる運動会



盆踊りで地域の絆を深める

る日程となっている。「ちびっこ相撲大会」は、もともとは本小牛田地区の子どもたちのための行事であったが、地域の子どもの数が減ったこともあり、2008年から美里町内6小学校の児童が参加するようになった。また近年は、「本小牛田夏祭り」の翌日に美里町全体の祭りと花火大会が行われ

本小牛田地区 周辺情報

●山神社(やまのかみしゃ)  
小牛田駅から北へ2kmのところ  
にあります。藩政時代から安産  
の神様として東北地方に広く知ら  
れ、七五三・どんと祭では多くの  
参詣の人々で賑わい、美里の象  
徴的存在になっています。祭神は  
コノハナサクヤヒメ・オオヤマク  
イノミコト・天照皇大神・応神天  
皇の4柱です。



に指定管理者制度を導入し、同セ  
ンターの管理は推進協議会の事業  
となった。推進協議会では近年、  
親子向けの陶芸教室など子育て世  
代をターゲットにした事業を展開  
したり、SNSを用いた若い世代  
への情報発信を検討したりするな  
ど、現代のコミュニティ事業のあ  
り方を模索している。



小川久美子さん  
本小牛田  
コミュニティ推進協議会  
事務局。



末永むつみさん  
本小牛田  
コミュニティ推進協議会  
事務局。



佐藤勝栄さん  
本小牛田  
コミュニティ推進協議会  
会長。

メンバー方々にお話を伺いました

推進協議会の重要な事業のひ  
とつに「108コミュニティ新  
聞」の発行がある。タイトルの  
「108」は本小牛田地区を東西  
に横切る旧国道108号線(現在  
は町道)に由来する。現在の同紙  
の内容は祭りの案内や事後報告、

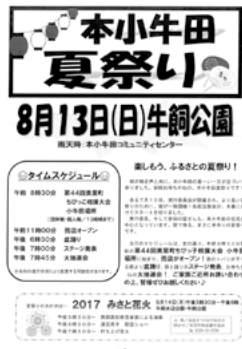
【宮城大生、取材同行記】

推進協議会が中心となって祭  
りや新聞発行を地道に取り組む姿  
勢に多くを学びました。本小牛田  
地区のコミュニティ事業は年々変  
化しており、形式を変化させなが  
らも持続可能なコミュニティが創  
出されています。センターの隣に  
ある陶芸館の賑わいが印象的でし  
た。いかに子育て世代や若い世代  
など幅広い層を巻き込んだコミュ  
ニティ事業を展開するかが肝心だ  
と学びました。

ている。

1982年に始まった「コミュ  
ニティ秋祭り」も、世代を超えて  
楽しめる地域のイベントである。  
以前は運動会、芋煮会、鯉釣り  
大会が行われていた。2001年  
以降は鯉釣り大会が行われなくな  
り、代わりにグラウンドゴルフ大  
会が実施されるようになった。

住民に情報を届ける  
コミュニティ新聞



108 新聞 夏祭り特集号



新しい駐在所の巡査の紹介など、  
年に2回、本小牛田地区全戸に配  
布されている。

時代とともに変わる  
コミュニティ事業

1970年代にスタートした本  
小牛田地区のコミュニティ事業  
は、時代の変化に合わせて形を変  
えながら今に至っている。前述の  
ように「鯉釣り大会」の様な特徴  
的な行事は開催されなくなり、年  
2回の祭りの規模も縮小してき  
た。その一方で、「ダンスや趣味  
のサークル」など30ほどの団体が  
今なお本小牛田コミュニティセン  
ターを拠点として盛んに活動して  
いる。

2011年には、美里町が本小  
牛田コミュニティセンターの運営

# 住民の生活スタイルに合わせ 変化し続けるコミュニティ活動

駅東地区・美里町駅東自治会



## 駅東地区の宅地形成と 住民組織のあゆみ

「ゆとり」と小牛田（以下「ゆとり」と）は、JR小牛田駅東地区の土地区画整理事業として1999年に開発が始まり2006年から県住宅供給公社が分譲を開始した住宅団地の愛称である。2011年の東日本大震災以降、被災地からの移住者、そして子育て世代などへの分譲が進み、2019年に住宅用地全区画

が完売となった。

「ゆとり」のエリアは、分譲開始後しばらくは不動堂4行政区の一部となっていた。2011年、このエリアを新たな行政区とする計画が動き始め、2013年4月、駅東行政区が設置された。さらに震災後の人口増加を受けて、駅東行政区は2016年から駅東1区と駅東2区に分かれた。駅東地区に美里町駅東自治会が発足したのは、行政区が分かれる前の2013年6月である。駅東



駅東カフェ

自治会は6班構成からスタートして現在は19班構成となっており、年6回の役員班長会議を行っている。また自治会主催で自主防災会

## 住民の交流を図る イベントの実施

議や高齢者お茶飲みサロン、そして後述の「駅東ゆとり」と交流フェスティバル」（以下「フェスティバル」）などを定期的に行っている。

2013年、「ゆとり」との分譲が進み、駅東地区にはさまざまな土地からの移住者が集まっていた。駅東行政区長の秋庭博さん（当時。現在は駅東自治会長兼駅東2行政区長）らは「住民同士が顔を合わせる機会を設けられな

いか」と考え、美里町社会福祉協議会（以下「社会福祉協議会」を「社協」に省略）に相談した。ちょうどその頃、美里町社協で愛媛県内の社協（※）が研修活動（住民の状況を知る戸別訪問アンケート調査など）を実施していたため、美里町社協は彼らの協力も得て、「駅東カフェ」の開催を決めた。

「駅東カフェ」の開催は2013



小牛田駅東の分譲住宅



世代間の交流も生まれている

※愛媛県内の6つの社協（愛媛県をはじめ、松野町、鬼北町など）。美里町社協と愛媛県の各社協との交流は、東日本大震災後、両者が女川町で復興支援活動をしていたことに端を発する。

駅東地区 周辺情報

●駅東地域交流センター

子どもから大人まで、皆さんの集いの場・活動の拠点として、交流や学習を支援する施設です。地域の皆さんに年間を通して利用されています。



●えきフェスMISATO

JR小牛田駅、小牛田駅東地区周辺を会場に実施される一大イベント!車両の展示はもちろん、ミニSLの試乗やNゲージの展示など鉄道ファン必見です。ステージイベントでは、町民参加によるよさこい演舞や高校生のダンスパフォーマンスが繰り広げられます。



この方々にお話を伺いました



阿部純一さん

駅東自治会副会長、  
駅東1区行政区長。



秋庭博さん

駅東自治会長、  
駅東2区行政区長。



永沼威雄さん

美里町社会福祉協議会  
地域福祉課長。

年11月14日(木)の16時から20時。内容は、美里町や愛媛県の特産品を紹介するコーナーや、子どもたちの遊び場、餅まき、地元のボランティアグループ「かけはし」による「すっぱこ汁(美里町の郷土食)」の提供など。このときは約120名の参加があった。

翌2014年以降、この事業は「駅東ゆとり」と交流フェスティバル」の名称で開催されている。「駅東カフェ」、および2014、2015年の「フェス

ティバル」は駅東行政区と社協の共催である。行政区が2区に分かれた2016年からは駅東自治会の主催となり、社協は後援団体の一つになった。この頃には、役員・班長会議で企画を検討し、企業や福祉団体、ボランティアグループが協力団体として出店や企画に関わる今のスタイルが形成されつつあった。その後、班長らがより主体的に役割を担うようになり、イベントの運営体制は年々安定してきている。参加者も次第に増加

し、2019年度の第7回の参加者は約650人となった。また、2015年までは夕方から夜に開催していたが、駅東地区に多い子育て世代の参加を促すため子ども対象の企画を充実させ、2016年からは日曜の日に開催するようになった。参加者から1000円の参加費を集めるようになったのもこの頃からである。なお「フェスティバル」の運営資金は自治会費が中心であるが、町の補助金も活用している。

新たなまちづくりにおける自治会の役割

駅東自治会の秋庭会長が「順番に班長を引き受けてもらうのも大変だった」と振り返るように、発足当初から円滑な自治会運営ができたわけではなかった。しかし秋庭会長ら役員の働きかけや、行政や社協のサポートが功を奏し、今では自治会運営に対する住民の理解が深まり、2015年には自主

防災組織を発足させることもできた。「フェスティバル」などの取り組みを通して、子育て世代の交流や地域参加も見られるようになった。秋庭会長は今後の自治会運営について、「つながりの場を提供することが自治会の役割。深い交流じゃなくても、互いに顔見知りになるだけでもいい。今後、そのような活動を続けていきたい」と話している。

【宮城大生、取材同行記】

駅東地区のゆとりとエリアは、東日本大震災以降、様々な地域からの移住者がみられたと伺いました。そして、新たな行政区を設置するにあたって、フェスティバルの開催など、場の提供によって、住民同士の交流や充実した自治会運営の促進につなげようとしており、ここでは、ニーズの調査や運営改善に取り組んでいる姿が印象的でした。縁の下の努力の大切さをあらためて学んだ瞬間でした。

# 明治期からの特産品「北浦梨」 に新たな価値を見出す試み

北浦地区・北浦梨ブランド化研究会



## 明治時代から 地域に根付く梨栽培

美里町の特産品の一つに、北浦地区で栽培される「北浦梨」がある。同地区での梨栽培の歴史は明治時代にさかのぼる。

明治政府は、明治7年から9年にかけて、全国に梨やブドウ、モモの苗木を配布し、地場産品の育成に取り組んだ。当時の様子を示す資料として、北浦地区の日枝神社に立つ石碑には、地元農家の三

塚嘉太郎氏が石巻市大街道地区から北浦地区に梨を導入し、栽培を奨励したことが記されている。

以降、梨栽培は北浦地区の主要な生業のひとつとして、地域の暮らしの中に根付いてきた。そのことは、同地区の梨農家・佐々木昇さんの「私が子どもの頃、農家が稲刈りの時期に大量に梨を買っていましたね。農作業時の水筒がわりだったんじゃないでしょうか」という話などからも窺<sup>うかが</sup>える。

北浦地区には最も多かった

1960年頃、214戸27ヘクタールほどの梨農家があったが、現在は40数戸となっており、その多くはイチゴや野菜類、その他果樹、畜産などと併せた経営をしている。梨の販売方法としては、国道108号線沿道の直売所等での直接販売のほか、ゆうパック、県内の直売所での販売が多い。

佐々木さんにお話を伺いました



北浦梨  
ブランド化研究会会長。  
佐々木昇さん  
祖父の代から100年続く  
梨の栽培のほか、  
ハウスにてキウリを栽培。



明治からの特産品「北浦梨」



地域の暮らしにとって身近な梨



収穫量が限られるアッピー

北浦地区 周辺情報

●みやぎ総合家畜市場

北浦駅から南へ400mのところにあります。県内唯一の家畜市場として、多くの「せり」が開催されており、子牛の取引頭数では全国最大級を誇ります。



リンゴのような梨「アッピー」

北浦地区の梨農家が「北浦梨」として生産するのはおもに幸水、豊水、長十郎、あきづきなどの品種であるが、現在生産者らが注目しているのが当地オリジナルの品種「アッピー」である。

「アッピー」のルーツは、第二次世界大戦後に地元農家のたかむら 篁秀男氏が梨とリンゴの掛け合わせや接ぎ木などを繰り返す中で作り出した、リンゴのような梨「あずま」である。

篁氏が品種登録を申請した「あずま」は登録には至らなかったが、1990年に小牛田町役場職員によって「初姫」の名であらためて申請され、1993年に品種登録された。「初姫」は果肉にコルク

少ない「アッピー」の収穫量を増やす戦略の検討、果実の質を高める農法の分析、今後「北浦梨」として栽培する品種の調査、梨を用いた食品の開発など、「北浦梨」をさらなるブランド梨として育てる方策を研究・実践している。



きれいにパッケージされた北浦梨

質の鬆すが入ることが欠点だったが、その後小牛田農林高校で改良されて鬆の入らない果実が得られるようになり、リンゴのような赤い梨「アッピー」として2005年に品種登録された。

なお、「あずま」「初姫」「アッピー」はリンゴのような風味や色をもつため「りんご梨」とよばれるが、リンゴと梨の交雑種ではなく、遺伝的には梨である。

「北浦梨」ブランド化の動き

2018年6月、「北浦梨」の活用を検討する有志団体として、「北浦梨ブランド化研究会」が発足した。メンバーは梨の生産者12名。佐々木昇さんが会長を務める。「研究会」結成の背景には、北

浦地区の梨生産現場が直面する担い手の減少、後継者不足がある。「研究会」は、「北浦梨」の差別化を図り、他産地より有利に販売できるようにしくみを作ること、

梨生産の魅力が高まり、就農希望者の増加につながるのではないかと希望のもとに発足した。

「研究会」の会合は毎月1回開催され、メンバーのほか、美里町役場職員、美里農業改良普及センターの職員らが参加している。また、美里町出身のデザイナー・村上由夏さんが準会員となっている。

「研究会」では2018年、村上さんがデザインしたかわいらしい化粧箱に厳選した果実をつめて商品価値を高めるなどの事業を試みている。ほかにも、木の本数が

【宮城大生、取材同行記】

梨生産の過程で、多くの改良が行われていたことを知りました。今でいう6次産業化の取り組みが100年以上行われてきたのです。現在では、地元出身の若手デザイナーを巻き込んで、付加価値を高めた商品デザインの取り組みが行われており、地域の伝統的な梨産業を継承しつつ、時代や地域課題に合わせて産業を変化・改善させていく取り組みに学生も参加させてもらいたいと思いました！



# 地区の仲間を応援する声が響く 運動会形式の楽しい合同防災訓練

青生地区・青生地区合同防災訓練実行委員会



## 運動会スタイルの 合同防災訓練

美里町青生地区は、鳴瀬川の堤防沿いにある集落も多く、水害に対する危機感是比较的強い地域であるといえる。この青生地区で近年、行政区の垣根を越えた合同の防災訓練が開催されるようになった。2019年時点で、参加しているのは、堀切、松ヶ崎、梅ノ木、的場柳原の4行政区の住民。青生コミュニティセンターの駐車場を

会場に、バケツリレーや土のう積みなどを行政区対抗の競技形式で行う。会場に応援の声が響くユニークな防災訓練である。

## 合同防災訓練の 実現までのあゆみ

合同防災訓練が開催されるようになった端緒は2011年3月の東日本大震災にある。当時、青生地区内の行政区のうち、自主防災組織が設置されていたのは松ヶ崎行政区のみであった。震災当日、



チーム戦で競うバケツリレー

楽しく学ぶ消火器の使い方

指定避難所となっていた青生コミュニティセンターには100人以上の避難者が集まったが、同センターでは避難所運営の訓練がなされていなかったため、現場は混乱した。そこで松ヶ崎行政区の自主防災組織や地元の農事組合法人が中心となり、なんとか避難所を運営した。

これを機に各行政区では防災意識が高まり、2011年から2013年までの間に松ヶ崎以外の行政区でも自主防災組織が設置された。さらに2014年ごろから、行政区をまたいだ合同防災訓練の必要性が区長会などで論じられるようになった。

各行政区は独立したコミュニティを形成していたため、その垣根を越えた事業の実現は簡単

ではなかったが、各行政区長らの粘り強い啓蒙活動が功を奏し、2016年、松ヶ崎、堀切、梅ノ木の3行政区による合同の防災訓練が実現した。このとき訓練内容のベースとなったのが、数年前から防災訓練を実施してきた松ヶ崎行政区のノウハウであった。

## 運動会形式での 防災訓練の実施

第2回となる2017年以降、「みんなが参加できる楽しい防災訓練」をめざし、運動会方式での防災訓練を実施するようになった。がれきの中から負傷者を救い出す「救急・救護訓練」や、家庭でできる水害対策の訓練として導入した「土のう積み」などの技術を、各行政区から選ばれた代表



富田恭子さん  
防災指導部長、  
美里町消防団員。



鈴木正樹さん  
事務局次長、元役場職員。



沼下清一さん  
松ヶ崎行政区長、  
防災訓練事務局長、  
コミュニティセンター運営協議  
会会長、元JR職員。



内海政雄さん  
梅ノ木行政区長、  
防災訓練本部長、  
元農協職員。

この方々にお話を伺いました

校の連携を深めることは、災害に強いまちづくりにつながるものと考えられる。  
実行委員会では毎年、新しい訓練内容を取り入れながら、災害に



土のう積み

チームが競う。各行政区では合同防災訓練に先立って消防団員の指導のもとに練習するなど、積極的な取り組みがみられるようになっていく。合同訓練への参加者数は、2016年の第1回は260人であったが、前述の3行政区に的場柳原行政区も加わった第2回以降

は400人以上が参加している。2018年からは、水害時を想定した水中歩行訓練を取り入れ、そのために長さ5・4メートル、深さ0・9メートルの水槽を作成した。農業用水路から水を汲み上げ、2019年には水槽内に水流が生じるように工夫して歩行訓練を実施した。

2019年のプログラムは、防災グッズの説明、救急・救護訓練、土のう積み、バケツリレー、消火訓練、救援物資の配布、水中歩行訓練などである。また、美里町から保健師の派遣を受けて救護所を設けたこと、美里町社会福祉協議会による避難所相談コーナーを設けたこと、地元の障害者施設から車椅子利用者が参加したことなどがこの年の新たな試みであった。

備えて緊張感を持続できるような防災訓練を工夫している。今後の課題としては、避難所運営の訓練の実施が求められている。

〔宮城大生、取材同行記〕

青生地区の防災訓練と運動会を組み合わせたモデルは、防災を地域住民に身近に感じてもらう、参加しやすくなる先駆的な取り組みだと思いました。地域の行事も組み合わせによって斬新なることを学びました。この取り組みは何よりも楽しそうです。また、防災訓練の記録誌を作成することによって、次世代へ知識や経験が蓄積され、いざという時の防災力が向上していくと思います。

訓練の成果を  
災害時に生かすために

青生地区合同防災訓練の特徴として、当日の記録写真を集めた「記録誌」を作成していることがあげられる。「記録誌」を1枚の紙に編集したダイジェスト版は地区内の全戸に配布される。

「記録誌」作成の目的は、ひとつは防災訓練のノウハウを次世代に引き継ぐことである。もうひとつは、個々の住民が訓練内容を振り返ることで、非常時に対応できるスキルを高めることである。

また、青生小学校5年生の児童が防災学習の一環として参加していることも、この防災訓練の特徴である。訓練を通して児童らの防災意識を育むとともに、地域と学

青生地区 周辺情報

●青生コミュニティセンター

コミュニティセンターは、地域のみなさんが気軽に集まったり、学習するために設置された施設です。みなさんが自主的に利用し、あるいはコミュニティセンターの主催事業に参加するなど、地域のふれあいの施設としてお気軽にご利用ください。



# 「世界一の大俵」がシンボル 農村文化を生かした 一大イベント

南郷地区・田園フェスティバル実行委員会



三十回目を迎えた  
「田園フェスティバル」

農村文化を活用した地域おこしを目指して毎年6月に南郷地区で開催される「活き生き田園フェスティバル（以下「田園フェス」）」が、2019年に第30回を迎えた（2011年の第22回は東日本大震災の影響で開催中止）。会場は美里町野外活動施設のステージ

をメインに、美里町南郷庁舎前広場や南郷地区内各所。目玉企画の「長ぐつ飛ばし大会」のほか、地元小中高生の音楽やダンスのパフォーマンス、アーティストの音楽ステージ、花火ショー、農村交流企画、大俵パレードなど企画満載の一大イベントだ。



イベントを盛り上げる子供達の演奏

## 麦畑を舞台としたイベントとして誕生

「田園フェス」が初めて開催されたのは1990年。1970年代以降の国の減反、転作奨励の動きの中、南郷地区の農家の間では休耕田での小麦栽培が検討されていた。当時、町や県の青年団体等で要職を歴任していた地元農家の赤坂芳則さんは、麦畑を活用した地域活性化のアイデアを南郷町長に提言。その結果、竹下登内閣で1988年から実施された「ふるさと創生事業」の交付金を活用して「田園フェス」を実施することが決まり、実行委員会が発足した。1989年にリリースされたオヨネーズの「麦畑」がヒットしていた時期であった。



俵と人の対比でわかる世界一の大俵

赤坂さんらが目指したのは「町民総参加」のイベントだ。生産集団、農協、商工会、学校、PTA、役場など町内のさまざまな団体を巻き込み、ステージイベントに加えて麦畑を活用した迷路や宝探しなど独自の企画を盛り込んだフェスティバルを実施した。

## 変わってきたイベント内容

麦畑の活用を前提に生まれた「田園フェス」ではあるが、農地での企画は第3回を最後に実施されなくなった。麦の連作障害対策として作付け農地が移動するため会場となる圃場の場所を固定できなかったこと、麦畑での企画には人手がかかりすぎたことなどが理由である。そのほか、現在では実施されなくなった企画として、農

南郷地区 周辺情報

●木間塚十王山公園

南郷地域中央部に位置する木間塚地区にある小高い丘の十王山公園には、750年余りと言いつた榎の木が、町民を優しく見守るように悠然と立っています。公園にはたくさんの桜の木やつつじが植えられており、花見シーズンになると区民や町民が散策に訪れ、憩いのひとときを過ごしています。



●花野果市場

国道346号沿いの農産物直売所。お米、新鮮な野菜、生花や農産物加工品などがたくさん並んでいます。



長年運営に関わってきた人たちは、中心メンバーの入れ替わりが少なく、マンネリ化の傾向があるとの声も聞かれる。そこで実行委員会ではここ数年、「農村文化の活用」という趣旨をあらためて重視し、「農村交流」でサツマイモ植え体験をして秋にも収穫に來てもらおうプログラムなど、地元農産品を通して消費者と生産者の交流を深める取り組みに力を入れている。



片倉利子さん  
第7回から携わる。  
事務局長。



新田耕一さん  
総会社を10年務めた後、  
実行委員長を6年務めた。



石川俊樹さん  
第1回から関わる商工会青  
年部、広報部長。  
2019年から実行委員長。

メンバー方々にお話を伺いました

取材をしているうちに、南郷のみなさんが、「田園」という表現に誇りをもって活動していることに気づきました。それが、ごく数名の発案から始まったイベントが何十年も続いていることにつながっているのだと思います。地域資源を素敵に活用しており、また、最近も、あらためて、農村文化とは何なのかを見直していると同じ、これも持続可能性のヒントなのだと思いました。

【宮城大生、取材同行記】

家への嫁入りを再現した「田園の母コンテスト」などがある。一方、第1回から現在に至るまで実施されているのが「大俵バレード」と「農村交流」である。実行委員会が「世界一」を謳う米俵500俵分に相当する大俵を製作し、補修、リニューアルを行いつながら現在まで使用している。「農村交流」は、調理体験や農作業体験を通して地域の食文化に触れ、参加者と生産者との交流を図るものである。

例年「田園フェス」の目玉企画となってきたのが、農村文化を生かしたゲーム形式の催しだ。伝統的な足踏み脱穀機を用いた「麦こき大会」や、米俵のふた(たらばし)を投げて飛距離を競う「たらばし投げ」などがそれぞれにあたる。その



夜は花火も楽しめる



過去の田園フェスティバルのポスター

流れを受けて現在行われているのが「長くつ飛ばし」である。

ユニークな  
ポスターによる広報

「田園フェス」で注目すべき点のひとつに、人目を引くユニークなポスターがある。オヨネーズをイメージしたキャラクターが描かれた第1回から一貫して、イラスト中心のデザインだ。回を重ねるにつれ牛や豚や農夫などをイメージしたキャラクターが固まり、第10回のときにキャラクターの愛称を公募した。現在も、それらのキャラクターが描かれたポスターは広報活動の柱となっている。

「田園フェス」の現状と課題

実行委員会によると、現在「田園フェス」は美里町で最大規模のイベントとなっている。しかし、

# 泥だらけの笑顔があふれる 田んぼを活用した「全国大会」

荻埵地区・全日本どろんこそりレース大会実行委員会

## 酒席から生まれた 「全国大会」

水を張った田んぼでそりを引く  
タイムを競う「そりレース」など  
の競技が行われる「全日本どろん  
こそりレース大会(以下「そりレー  
ス大会」)が、美里町荻埵地区の  
田んぼで2009年から毎年開催  
されている。大会を主催する全日  
本どろんこそりレース大会実行委  
員会によると、子どもたちに土に  
親しんでもらう、青年たちに地域

アイデアが生まれ、実行委員会(メ  
ンバーは親友会と同じ)を立ち上  
げて2009年に第1回を開催し  
た。イベント名を「全日本」とし  
たのは、荻埵地区を全国の人に  
知ってほしい、全国から参加者が  
集まってほしいとの思いからだっ  
た。

その後「そりレース大会」は開  
催を重ね、地域の夏の恒例イベン  
トとなった。毎年の大会の企画・  
運営は実行委員会内の若手が中心  
になって担当が、当日の物販・飲  
食コーナーの運営などでは地域住  
民の協力も得ている。

## 子どもも大人もどろんこで 盛り上がる

大会のメイン競技の「そりレー  
ス」は、一輪車の船(皿)の部分



熱いレースが繰り広げられる

に誇りを持ってもらう、集まった  
人たちで「とにかく笑う」など  
が大会の目的。大会開催テーマと  
して「地域の笑顔でみやぎを元  
気に!!」を掲げる。

「そりレース大会」の構想は、  
2008年ごろ、荻埵地区の青年  
会「荻埵親友会」の酒席での「楽  
しいイベントを新しく作ろう」と  
いう話から始まった。農業が盛ん  
な地域性を念頭に「田んぼを生か  
したイベントを」と考えた結果、  
泥の中でそりを引く張る競技のア



小野寺さんにお話を伺いました

全日本どろんこそりレー  
ス  
大会実行委員会

小野寺良太さん

美里町荻埵地区。  
民間企業に6年間勤務、東日  
本大震災を機に退職、専業農  
家を継ぐ。第5回から大会事  
務局を引き継いでいる。



に重りを載せて田んぼの中を引いて42・195メートルのコースを走り、タイムを競うものである。一般の部のほか親子の部、小学生の部がある。

一般の部の対象は中学生以上。50kgの重りを乗せたそりを2人組で引く張る。重りの重さは、男女ペアの場合は40kg、女性ペアの場合



どろんこそりレースのシンボルマーク



地元農家の協力により提供される田んぼ

合は30kgとなる（以前は一律60kgの重りで実施）。2019年の大会の優勝者は中学生女子のペアであった。親子の部では子を乗せたそりを親が引く張り、小学生の部では20kgの重りが載ったそりを2人で引く張る。

「そりレース」以外の競技としては、2019年現在、田んぼに立てたフラッグに向かって走りフラッグをつかむまでの速さを競い合う「どろんこフラッグ」や、田んぼでの徒競走「どろんこダッシュ」（対象は小学生以下）がある。過去には田んぼの上に架けた幅30cmの板の上を自転車で渡る「自転車一本橋」

などの競技も行われていたが、負傷の危険があるという意見があった。行われなくなった。

「そりレース大会」には例年300人ほどが集まり、うち100人ほどが競技に参加する。競技出場者の仮装や、大会スタッフによる出しもの、地元有志が作った張り子のキャラクターなど、毎年さまざまなパフォーマンスが会場を盛り上げる（近年の大会では張り子は登場していない）。会場となる田んぼは実行委員会が地元農家から借りてレクリエーション用の農地として管理しており、春に耕して夏の大会に向けて準備する。この田んぼでは農薬・除草剤を使わず、スタッフの手で除草・整備している。また大会の運営資金は、企業・個人事業主か

らの協賛金、競技参加者からの参加料、行政区からの補助などでまかなっている。

**地区内外の人が集まる交流の場**

「そりレース大会」には地元住民のほか、宮城県内、県外からも参加者が集まる。町内で研修・就労する農業関係の技能実習生やALTなど外国人の参加も恒例になり、さまざまな人の交流の場となっている。

かつては大会前日に地元ミュージシャンによるジャズ演奏を聴きながら窯焼きピザを味わう「どろんこ前夜祭」を開催していたが、第6回を最後に開催されなくなった。

実行委員会では現在、前夜祭に

代わる親睦イベントや、大会を終えた後の田んぼに作物を植えて収穫物を味わう催しなど、大会から派生するさらに幅広い交流を生み出せないか模索している。

**【宮城大生、取材同行記】**

日本初の田んぼを使ったどろんこそりレース、酒席での自由活発な話し合いから生まれたことを知り、地域ならではのクリエイティブで魅力的なアイデア創造の仕組みを知りました。行事の維持は大変だけど、自然や田んぼと楽しく触れ合うことで、自然への理解、自分の地域への関心や愛着を高めることにつながっています。また、多種多様な参加者を受け入れることによって、様々なつながりが生まれ、幅広い交流につながっていると感じました。

**荻 梓 地 区 周 辺 情 報**

**●松景院（神寺不動尊）**

小牛田駅から北へ7kmの中梓地区内にあります。東北三十六不動尊に数えられている真言宗の神仏混合のお寺です。本尊、不動明王は、高さ7mほどもあり、塑像としては、世界でも最大の規模を誇っています。



# 米国・ウイノナ市との交流を通じて 町に異文化理解の土壌が築かれた

美里町国際交流協会

## 派遣事業を担ってきた 国際交流協会

美里町内の中高生をアメリカに派遣する「中高生アメリカ派遣事業」が始まったのは、1998年（初期は中学生のみ）。この事業を当初から主導してきたのが、現在の美里町国際交流協会（以下「協会」）である。

1996年、当時の小牛田町長佐々木功悦さんの「子どもたちの国際感覚を育みたい」という思い

## ミネソタ州 ウイノナ市との交流

美里町の国際交流の特徴は、ミネソタ州ウイノナ市との結びつきがきわめて強いことにある。同市との友好関係が発展したきっかけ



ウイノナ市の学生との抱擁を交わす子どもたち



美里町を訪れたウイノナ市の学生

から、協会の前身である「国際交流を進める会」が結成された（※）。

町の文化団体関係者などで構成されたメンバーの中には、現在協会の会長を務める鎌田裕明さんが名を連ねていた。鎌田さんは学生時代にアメリカに留学したことがあり、そのことを知っていた佐々木町長が声をかけたのであった。

そして1998年、「第1回小牛田町中学生海外派遣事業」で2名の中学生がアメリカに派遣された際、その計画・引率の中心になっ

のひとつが、1998年の第1回訪米の帰りの飛行機で、鎌田さんがウイノナ市出身のビジネスマン、スコット・シェーファーさんと知り合ったことであった。鎌田さんはウイノナ市の行政や学校関係者ともつながりのあるシェー

たのが鎌田さんら「進める会」のメンバーであり、そのスタイルは少しずつ形を変えながら現在に引き継がれている。鎌田さんらが主導する派遣事業のコンセプトのひとつが「本物を見せる」こと。毎回の派遣の旅程の中で、バスケットボールやミュージカルなど、本場の雰囲気味わえる機会を設けている。

※「進める会」は2000年に「小牛田町国際交流協会」に、2006年の小牛田・南郷2町合併により「美里町国際交流協会」になった。

ファーさんとのやりとりを通じ、翌1999年の中高生の訪米先をウイノナ市に定めた。ウイノナ市の人々は、初めて同地を訪れた小牛田町の一行を歓迎した。またま数年前にウイノナ市を訪れた佐々木町長が同地への憧れを抱き続けていたこともあって両地域の交流は急速に進展し、2001年、小牛田町とウイノナ市は姉妹都市となった。2003年からは、美里町からの派遣だけでなくウイノナ市の学生らの来訪も毎年行われている。

1999年以降、現在に至るまで、ウイノナ市滞在は派遣旅程の軸となっている。参加する中高生らは滞在日程の大半をホームステイ先の家族と過ごし、現地の人々の日常生活を体験している。

美里町国際交流協会



畑中真里菜さん  
東北学院大学法学部。南郷  
中学校2年の時に「中高生  
アメリカ派遣事業」に参加  
訪米。



佐々木文子さん  
美里町国際交流協会役員  
第1回目の訪米に参加。



鎌田裕明さん  
美里町国際交流協会会長。

メンバー方々にお話を伺いました

に派遣事業に参加した学生の親など、異文化交流に理解を示す町民が多数関わっている。  
協会では、訪米団の派遣・引率、ウイノナ市からの来日チームの対応のほか、町内在住の外国人と町



2001年、ウイノナ市と友好都市となる

地域に根付く  
異文化理解への意識

20年以上にわたり続く海外派遣事業は、町民、とりわけ小中高生の異文化への関心を着実に育んで



ウイノナ市の風景

きた。中学2年のときに派遣事業で訪米した畑中真里菜さんは、小学生の時に美里町を訪れたウイノナ市の学生と英語で話す中学生の姿に憧れたことが、参加を志したきっかけだという。畑中さんは小学校高学年から英語を習い始め、中学校ではALTに英会話の指導を受けて選抜試験に臨んだ。派遣

民が交流する「オータムフェスタ」の開催、国際交流情報誌「パザパ」の発行などさまざまな活動を続けており、美里町の異文化交流の進展に寄与し続けている。

【宮城大生、取材同行記】

ローカルで暮らしながら、グローバルに触れる機会があるのは素晴らしいと思いました。毎年交流を重ねて行くことで、地域全体のグローバル意識も徐々に高まっていると思います。また、地域の多くの方が活動資金を出資している、地域全体で子どもを育てている環境に関心を持ちました。このような機会があることで、子どもたちも鎌田さんとシェーファーさんのような素晴らしい出会いを経験できると思います。

に参加できる中学生には定員があるが、例年、定員を超える応募があり、面接等によって選考される。畑中さんのように海外派遣を希望する子どもたちが多くいるのは国際交流活動の成果といえよう。  
美里町国際交流協会は会員が納める年会費を活動資金としている。現在会員は約200人。過去



地元の学生との集合写真

美里町国際交流協会 関連情報

●姉妹都市交流

ウイノナ市（アメリカ合衆国ミネソタ州）  
締結年月日：平成19年10月20日・人口：約27,000人  
ウイノナ市はアメリカ合衆国ミネソタ州の南東部にあり、広大なミシシッピ川沿いに位置する自然豊かな都市です。1851年に蒸気船の船長オリン・スミス氏によって築かれ、製材産業を中心に発展してきました。歴史的な重要文化財に指定されている建物が多く、自然と歴史が共存するとても美しいところです。





# 地域に暮らす仲間が集まり 「土田畑村」に新たな風が起きた

南郷地区・DoTaBaTaナイトマルシェ実行委員会



25周年を迎え再注目される  
「土田畑村」

美里町南郷地区の水田が広がるエリアにある「土田畑村（美里町交流の森・交流館）」は、地域内外の交流を目的として1994年8月に設置された宿泊施設である。敷地内には広場を取り囲むように宿泊棟・管理棟など6棟のログハウスが立つ。開館25周年となる2019年には「美里町交流の森・交流館長寿命化計画」が策定

され、2020年現在、施設の長寿命化、観光拠点機能の強化をめざした空間の再生が住民参加型で進められている。

この「土田畑村」が地域住民の注目を集めたのが、2019年8月24日に開催された「DoTaBaTaナイトマルシェ」である。音楽ステージや地元食品の屋台、さまざまな体験企画などからなるイベントに、町内外から大勢の人が足を運んだ。

地域に暮らす仲間たちの  
思いが共鳴した

「DoTaBaTaナイトマルシェ」の発端となったのは、町内で2014年からベーカリーを営む渡邊晶さんの「地元の魅力をみんなで楽しめる場所をつくりたい」との思いだった。渡邊さんは2019年春、町内在住のサックスプレイヤー・名雪祥代さんの演奏を地元のお酒・食べ物とともに楽しめる催しを考え、名雪さんに



来場者も出演者も楽しめる音楽ステージ



夜になるとたくさんの方が集まる

相談すると、名雪さんもその思いに共感。2人で会場を検討し始め「土田畑村」を視察したところ、「名雪さんのサックスの音色とこの風景が合う」（渡邊さん）、「ステージと広場の距離感がちょうどいい」（名雪さん）と感じ、同施設を会場にすることを決めた。

渡邊さんと名雪さんは2019

年5月、町内在住の高野香梨さんを加えた3人で「DoTaBaTaナイトマルシェ実行委員会」を立ち上げ、3か月後のイベントに向けて準備を進めた（※）。町内外から屋台の出店者を募るとともに、「聴く・学ぶ・体験する」をイベントの3本の柱とし、音楽ステージ、出店者らが持つノウハウや専門知識を学ぶ「大人塾」、子供も大人も楽しめる体験企画「ワークショップ村」を充実させた。さらに、お祭りの雰囲気演出するため、イベント当日のみ通用する通貨「ドタ紙幣」を発行するなどのアイデアも練っていった。

開催に向けた実行委員会の活動を支えたのが、「土田畑村」館長の山本和幸さんだった。広報活動のほか、行政との交渉・調整を引

南郷地区 周辺情報

●でんえん土田畑村  
(どたばたむら)

木の香りとぬくもり、そしてハーブの香りですがこころの疲れを癒すログハウスの宿泊施設。家族でのんびり過ごせる1棟貸し施設。目の前には広大な田園風景。周辺には温水プールやテニスコートなど町営のスポーツ施設があり、さわやかな汗を流して心身ともにリフレッシュできます。自炊用器具が完備しており家族みんなでつくる料理の味は格別。



山本和幸さん  
美里町交流の森・交流館  
「でんえん土田畑村」館長。



名雪祥代さん  
DoTaBaTa ナイトマルシェ  
実行委員、  
サンクスプレイヤー。



渡邊 晶さん  
DoTaBaTa ナイトマルシェ  
実行委員会  
パン工房プラタタ経営。

メンバー方々にお話を伺いました



春にはきれいな桜が咲く



リニューアル時のようす



子どもも楽しめる出店ブース

【宮城大生、取材同行記】  
景観や環境を整えることによつて、市民参加型のイベントが自然的に生まれたことに驚きました。実行委員会の皆様が楽しそうにお話していたのが印象的で、本当に楽しいイベントだったことが伝わってきました。体験企画も充実しており、大人と子供も楽しめて、来場者・出店者・主催者みんなが楽しさを表現できるナイトマルシェの仕組みのデザインが出来上がった経緯から多くのことを学ぶことが出来ました。

き受け、小牛田駅と会場を結ぶシャトルバスの運行、会場の交通整理などに関して美里町の協力を取り付けた。  
**来場者、出店者、主催者がひとつになった**

「DoTaBaTa ナイトマルシェ」に込める渡邊さんらの思いが伝わるにつれ、ボランティアスタッフや協賛という形で地域住民の協力も得られるようになった。そして迎えた当日、会場には目標の300人をはるかに超える約1000人が集まった。  
盛況だった1日のなかでもとりわけ渡邊さんらの印象に残っているのが、フィナーレの時間帯である。体験企画の一つ「歌を作ろう」で参加者が言葉をつないで作った

歌を、参加者、出店者が一緒になって歌い踊った。  
名雪さんは「ステージで演奏しながら、みんなが踊っているのを見ていた。楽しさを表現できる場をみんな待っていたんだな、と感じた」と話し、渡邊さんも「この場所は必要だったんだ、と感じることができた」と振り返る。  
実行委員会の面々や山本さんは、「来場者も出店者も主催者もみんなで盛り上げられるこんなイベントを毎年続けて、美里町全体のお祭りに育てていきたい」と、次回以降への展望を描いている。  
※渡邊さんらは「DoTaBaTa ナイトマルシェ実行委員会」という名称で活動を始めたが、自分たちの活動を「Happiness Clover Project」の愛称で呼んでいる。3人の実行委員がクローバーの3枚の葉となり、時に地域、時に行政、時には他の誰かがもう1枚の葉となり、合わせて「幸せの四つ葉のクローバー」となることをイメージしている。

# ローカルに学ぶ持続可能なまちづくりエッセンス

宮城大学事業構想学群 准教授 佐々木秀之

## 美里町の地域づくりを取材することに

美里町は2006年に、小牛田町と南郷町が合併して誕生した自治体です。事例集の作成にあたって、旧小牛田町にある5つの地区（本小牛田地区・北浦地区・青生地区・萩塚地区・駅東地区）と南郷地区を訪ねて回りました。加えて、南郷地区の中心部にある交流施設「でんえん土田畑村」と美里町国際交流協会の取り組みを取材しました。

取材を試みた背景には、これまで美里町で各種委員を務めてきた中、美里町の魅力を再発見して

たいという思いがありました。まちづくりは「何もない」から始まるといわれますが、実際に地域を訪問し、お話を伺うと、続々と宝話が出てきます。取材には、私のほか、宮城大学佐々木研究室の3年生10名が毎回2〜3名同行しました。事例集では、取材に同行した学生のコメントも掲載しました。

取材は、2019年の夏から、2か月に一度の割合で実施してきました。取材の過程で、学生達との話の中で出てきたキーワードから、本事例集のサブタイトル「ローカルに学ぶ持続可能なまち

づくり」がうまれました。持続可能な地域づくりが問われる今日において、学生達は、美里町の地において、地域の知を実践的に学ぶことが出来たのです。

## 何ったお話を分析してみました

事例集では、ヒアリングした内容をもとに、限られた字数の中で、地域の活動を紹介しました。ここでは、掲載しきれなかったヒアリングの全文データを基に、テキストマイニングという調査分析手法をもちいて、8つの事例についての若干の考察を試みたいと思います。

す。

テキストマイニングとは、文章データを分析し、語の使用傾向やパターンを明らかにする手法です。今回用いたのは共起ネットワーク図という描画方法で、語の円の大きさが大きいほど語の出現

回数が多く、語と語の間の線が濃いほど、結びつきが強い関係性であることを示しています。また、同時に出現する度合いが大きい語がまとまりとして描かれています。

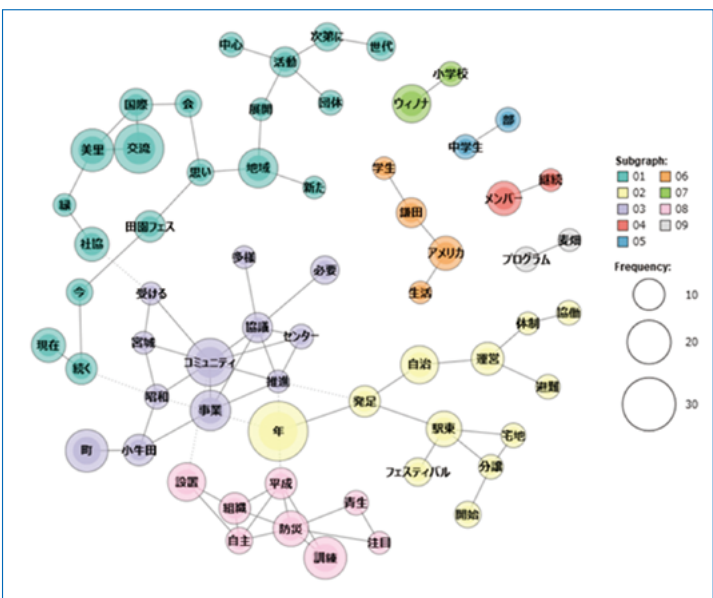
図を見ると、左下部に「小牛

田」、中央下部に「青生」、右下部に「駅東」を含むまとまりがそれぞれ確認でき、各まとまりに属する語はそれぞれの地域の特性や特徴を表しています。一方で、これらのまとまり同士をつなぐ語は殆ど確認できないことから、美里町という括りではあっても地区毎の特性や特徴は異

なり、今後の持続可能なまちづくりのために、これらの固有性を保ちながら横の連携を構築していくことが求められると考えることができます。また、上部では、地域という語に、思い・展開・新たな世代といった語が連関していることが確認されます。ここから、取材した8つの事例、それぞれの地域では、シビックプライドともいわれるような地域への思いや誇りを強く抱いており、また新たな世代への展開を考えていることを推測することが出来ます。これらは、持続可能なまちづくりにおける重要なエッセンスです。

## お話から学んだこと

ヒアリングの過程では、データに示されない多くのことを学びました。学生たちが特に関心を持つ



8事例のヒアリングデータを基に作成した共起ネットワーク図

たのは、自助・共助・公助という講義で出てくる表現の実際の姿です。たとえば、地域の備蓄について伺うと、米と味噌が各家庭で作られていて、それが常備されており、足りない時は分け合っていたというのを伺いました。このことは自助・共助の実情であり、災害時への備えでもあるわけです。また、地域の行事に、行政の支援（公助）を受けるようになったのは最近のことだとも伺いました。地域で資金を出し合って、事業を展開してきたものの、商店や事業者が少なくなり、寄付の減少と同時に、まちづくりの担い手が減っていったようです。

取材した取り組みについて伺っていると、どれも何十年と続いているものであることに気づきました。そして、その過程では多くの

創意工夫があり、ここに持続可能性のヒントがあると考えるようになっていったのです。一方で、現在は多くの地域課題を抱えており、行政との連携も視野に入れながら、地域資源を再認識し、多様なセクターと積極的に連携し、地域コミュニティの活性に、現代的な視点を盛り込んで活動している実情もみることができました。

### 協働のまちづくり

先ほどの図の右側部分に、自治・運営・体制・協働といった語を確認することができます。地域の課題が多様化・複雑化する中、協働に関する地域の関心は高まっているとされます。協働の定義も時代にあわせて変化しています。かつては、地域住民と行政の2者が主体とされてきましたが、東日本

大震災以降、全国的に多様な主体による協働が進められています。地域や社会における困難な課題は、単一の主体よりも、複数の主体のほうが、効果的に、かつ楽しく取り組めることがわかってきたのです。地域の課題を、深刻に捉えながらも、課題解決の現場に魅力やチャンスを感じる若者の存在も確認できました。是非、この事例集を手にとってくれた皆様が、地域の活動に可能性を感じ、新たな担い手となってくれることを期待したいと思います。

## 宮城県美里町協働のまちづくり活動事例集 ローカルに学ぶ 持続可能なまちづくりエッセンス

令和3年3月発行

発行 美里町まちづくり推進課

〒987-8602 宮城県遠田郡美里町北浦字駒米13  
TEL：0229-33-2180 FAX：0229-33-2160

編著 宮城大学事業構想学群 准教授 佐々木秀之  
宮城大学事業構想学群地域創生学類 佐々木秀之ゼミナール  
堺麻琴・佐藤光善・高橋啓太・佐藤水月・山口真未  
大槻紘也・澁谷舞奈・菊池健太郎・柏原大翔  
武田莉愛

表紙イラスト 村上 美緒  
執筆補助 加藤 貴伸

